病院理念『相手の心情に寄り添う愛のある医療を笑顔で実践します』と『病理外来』実践

国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター
院長
谷山　清己

私が院長に就任してしばらくしてから，病院理念を表記に変えました．当センターは高度急性期医療を担っており，「安心，安全で理にかなう医療」をモットーに，周産期医療から終末期医療まで幅広い医療を絶え間なく行っています．人は，忙しければ忙しいほど，目の前の現象に集中して的確な判断をより短時間で下そうと努力します．その状況が続くと，人はしばしば，作業効率のみに心を奪われ，その作業（仕事）が持つ本来の意味や本質を見失いがちになります．

『病院理念』は，職員にとって，働く意味や仕事の本質を規定するものです．ですから，忙しい時にこそ，この病院理念を思い出して医療の本質に立ち戻らなくてはいけません．医療の本質を表す言葉として，従来，「医は仁術なり」があります．「仁という儒教での最高の徳」を施術するという意味です．「徳」は，精神的・道徳的に優れた品性や人格であり，修養によって得た精神的能力で自らを高め，他を感化するものです．それでは最高の徳というのはどのような精神状態でしょうか？

私はそれを,「相手の心情に寄り添う愛のある心」だと考えます．その心を相手に伝えるには“笑顔”が欠かせません．当センターの病院理念『相手の心情に寄り添う愛のある医療を笑顔で実践します』は，医療の本質『仁術』を具体的に表現した言葉です．

私は20年近く，病理医として患者に病理診断を直接説明する『病理外来』を行っています．この外来には患者の心理状態を改善する効果があり，看護師との連携は，がん患者の心を救う活動となっています．すなわち，「相手の心情に寄り添う愛のある医療」の実践です．

「がんと診断された時からの緩和ケア」推進は，平成24年６月に見直された第２期がん対策推進基本計画の中で謳われており，より早い時期から適切に緩和ケアを提供していく体制を整備することが推奨されています．具体的な内容として厚生労働省は，医師から診断結果や病状を説明する体制の整備を求め，また，必要に応じて看護師などによるカウンセリングを活用することを薦めています．これらは，当センターの『病理外来と看護師によるカウンセリングを併せて行う活動』の趣旨に完全一致するものです．

現在まで，『病理外来』を自主的に訪れる患者の多くは乳がん患者です．がん治療の根拠となる“がん診断”の確定は病理診断によってなされます．近年の分子標的治療薬の発展から，病理診断に記載されてあるがん細胞の所見が治療選択に重要となっています．多くのがんの中でも特に乳がんでは，病理組織学的がん細胞所見に順じて治療選択が行われますので，がん診断とがん細胞所見を正確に知ることは，治療方針根拠を正確に知ることになります．治療方法決定に重要な影響を与えるけれども直接的には治療に関与しない病理医が，治療根拠となる病理診断結果やがん細胞所見を判りやすく，且つ詳しく説明すると，患者の病態と治療への理解が明確になり，納得することで不安が軽減・解消します．引き続いて行われる看護師によるカウンセリングによって不安軽減・解消効果が強まり，患者は治療に対して積極的になります．他方，病理外来において，厳しい現実を受け入れられないままでいる状態の患者が見つかる場合があります．その場合は，他部門の医療スタッフと連携した継続的なサポートを始めるきっかけになります．『仁術』を具体的な言葉で表す「病院理念」を病理医として具体的に実践しているのが，『病理外来』なのです．